

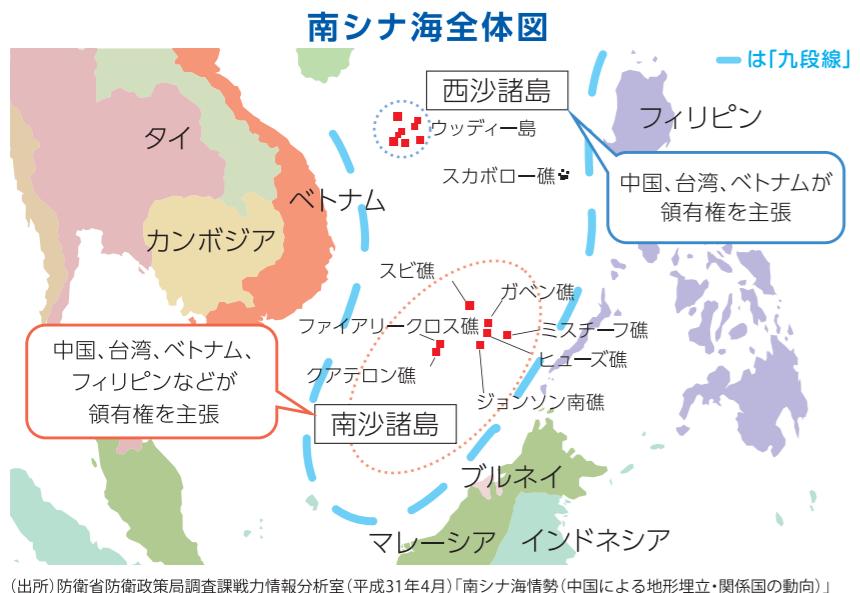


## 第13回 TOYROランチセミナー

# 参議院選挙後の政治と外交

兵庫県立大学 理事長  
ひょうご震災記念21世紀研究機構 理事長  
神戸大学名誉教授

い　お　き　べ　ま　こ　と  
**五百旗頭 真**



(出所) 防衛省防衛政策局調査課戦力情報分析室(平成31年4月)「南シナ海情勢(中国による地形埋立・関係国行動)」

意思はあっても自分が強ければ、奪い取るのである。

では、尖閣はどうだろうか。70年に地下資源が豊富であるとの国際機関の報告があつた途端、中国は尖閣を自分のものだと言い出した。しかし、奪い取らない。その理由の第一は、非常に優秀な海上保安庁の存在だ。中国はしばしば尖閣で領海侵犯に来るが、必ず海上保安庁の船が先に来て待っている。そして、領海に入らせないように併走して押し出す。海上保安庁は航空自衛隊と緊密に協力して、

多くの島からなる尖閣全体を綿密にマークしているので、中国はスカボロー環礁などを奪い取ったようにはいかないのである。

第二は、日本の高性能な潜水艦である。日本の潜水艦は、航続距離やスピードでは中国の原子力潜水艦にかなわないが、音を立てないのが特長である。日本の潜水艦が中国の潜水艦に遭遇しても、中国側は日本の潜水艦とすれ違つたことすらわからない。

第三は、SSMという巡航ミサイルである。これは、もともとソ連の北海道上陸に備えたものだったので、射程は100～150kmと比較的短いが、与那国島、石垣島、宮古島の3カ所から撃てば、尖閣近辺の軍艦の艦橋や軍事指令部室等の中核機能をピンポイントでたたくことができる。そういう巡航ミサイルを日本が持っていることを中国は知っている。日本は専守防衛で非常に限定的だが、その防衛能力はフィリピンやベトナムとは比較にならない。

加えて、日本には日米同盟がある。かつてフィリピンと米国との相互防衛条約が空文化した瞬間、中国はミスチーフ環礁を奪った。一方、日米同盟は冷戦後にむしろ進化して、オバマ大統領は、尖閣を日米共同で防衛すべき対象であると明言した。こうなると、中国も手出しできない。

### 明治から平成を元号とともに振り返る

ここで、明治から平成までの歴史を元号とともに振り返りたい。元号は、良き」と願を

定めた欽定憲法といふことで、畏れ多くて改められた20議席までは届かず、国民民主党は減らしたといえ、これは6年前の勝ち過ぎがやや修正された程度だ。安倍政権は長期政権で飽きも出てくるし、外交はともかく内政面では感心しないこともあるので、野党へ振れる可能性もあつたが、立憲民主党は予想された20議席までは届かず、国民民主党は単独過半数にやや足りなかつたが、公明党が増加したので、ゆうゆう与党過半数、安定多数である。

ただ、維新とあわせて改憲を可能とする3分の2を超えたことがよく論評されているが、これはさほどリアルな問題ではない。重要なのは、憲法のどこをどう改正するかである。

私は憲法改正をすべきだと思っている。金科玉条で一度決めたら変えられないというのは日本の欠点である。

明治憲法の大きな欠点は、首相の権限が弱すぎたことにあつた。首相は、大命を受け組閣を行うが、首相に任命権はあつたが、罷免権はなかつた。しかも、全会一致主義だったので、閣僚のうちに一人でも断固抵抗する者がいたら、物事を決定できない。激しく対立する案件があれば、先送りにするか、内閣総辞職をして新しい政権をつくるしか方

とといった憲法改正を大正時代に行つて、いついた歴史があるのである。憲法は状況の変化に合わせ、具合の悪いところを行、作り変えていく努力をしないと、また法律を抱いて滅びることになる。

### 日本の防衛力と中国の海洋進出

中国は1992年制定の領海法で「東シナ海の尖閣列島および南シナ海の九段線の内側の島々は、すべて中国の真正な領土である」とした。そして95年、中国は突然フィリピンのミスチーフ環礁を奪つた。フィリピン海軍は圧倒的な中国海軍の前に手も足も出せなかつた。2012年、中国はスカボロー環礁も同様にして奪い取つた。相手に抵抗する力がないと思ったら簡単に奪い取るのが中国だ。南シナ海に多くの島を持つベトナムは、ベトナム戦争のとき中国に支援をしてもらつたこともあり、「俺の島をとるな」とは言えなかつた。西沙諸島は、中国に半分を取られ、その後もまた半分取られた。さらに中国は、南シナ諸島の五つの環礁を実力行使で取りに出た。ベトナムは雄々しく交戦したが敗れた。中国は、相手が抵抗する意思も能力もない、

大正は、「大いに亨るに正をもつてす、天の道なり」という『易經』の言葉だが、大正天皇は病弱で、10年にして病に屈し15年には亡くなられた。第一次大戦での勝利で国際連盟では五大国の一つとなつたものの、世界の中でどういう役割を担うのか、国内でいう築くのか、という課題を抱えたまま終わってしまった。

昭和は「百姓昭明なり。万邦を協和せしむ」という『書經』の言葉からきている。国民すべてが平和で安定していく、世界に平和をもたらすという大変高い望みを語つていった。しかし、昭和の前半は、世界を敵にした戦争で国を滅ぼしてしまつた。日本史の中で失敗はいくらもある。例えば663年の白村江の戦い。唐・新羅の連合軍に滅ぼさ

# 参議院選挙後の課題

れた百濟の再興を助けるため、齊明天皇の名のもとに中大兄皇子が2・7万人の大軍で朝鮮に出撃したが、朝鮮半島の周りの潮流や気象を調べず、指揮作戦もなく押しかけたため、2日で壊滅した。その後、古代にしては唐・新羅が仲間割れを起こし、日本に攻めてくることはなかつた。一方、昭和20年の日本は、日本の本土全体が占領されるという空前絶後の大敗北を喫した。「万邦を協和す」ところか、壊滅、亡国の悲哀を託つことになつたわけである。ところが、日本には不思議な再生バネがある。例えば、白村江の戦いの後、唐文明をしつかりと学び、半世紀後には、律令国家の首都・平城京をつくつた。こうした再生バネは、日本列島に自然災害が多いことと関係があると思われる。普段は豊かな恵みを与えてくれる大自然が、地震や津波などで唐文明をしつかりと学び、半世紀後には、律令国家の首都・平城京をつくつた。こうした再生バネは、日本列島に自然災害が多いことと関係があると思われる。普段は豊かな恵みを与えてくれる大自然が、地震や津波などで



平成は、「内平らかにして外成る、地平らかにして天成る」という『史記』と『書經』をもとに名付けられた。しかし、「平」でも「成」でもなかつた。第一にバブル崩壊後の長い経済停滞、第二に阪神淡路大震災や東日本大震災など大災害の頻発、第三に国際動乱、という三重苦の時代だった。国際動乱について言うと、米ソが一極秩序を保つていた時代と異なり、何でもありの時代となつた。グローバル化が進めば進むほど、民族間や宗教間の紛争が起つて、世界の秩序を乱したA級戦犯は、①イスラム過激派の自爆テロ、②北朝鮮の核とミサイル、③中国のやや傍若無人な超大国化、であった。

**米中覇権争いの中で日本が果たすべき役割**

③の中国について考えると、中国は鄧小平の改革開放以来30年にわたつて、年平均10%の高度成長を続け、2010年には日本を抜いて、世界第2位の経済超大国になつた。しかも、中国は信じがたい大軍拡も行つてゐる。例えば、西太平洋上の米空母を大気圏外からの弾道ミサイルで沈める能力を持つてゐる。そう考へると、先に述べた海上保安庁、優れた潜水艦、巡航ミサイルという日本の三つの手段では十分ではない。ミスチーフ環礁などを奪い取つたのと同じようにはできないと中国に思はせるにはどうすればよいか。

一つは、スタンド・オフ・ミサイルである。従来の射程200km程度のSSMではなく、トランプは破棄したが、安倍首相はTPPを

新しいF-35には射程500~900kmのミサイルを標準装備することが想定されている。そうすると、日本列島の太平洋側にいても届く。もちろん、それを使ってこちらから北朝鮮や中国と戦争を仕掛けることはない。しかし、ミスチーフ環礁などのように、打つ手もなく取り上げられると思つたら行動しなければいけない。つまり、「日本は侮りがない」と思はせるものを持ちながら、しかし、戦わないということである。

米中間の対立は経済戦争だけではなく、霸権争いも深刻である。ハーバード大学のグレアム・アリソン教授は、500年の間に新興国が既存の大国に挑戦した15のケースを取り上げ、そのうち11回が戦争になつたと分析している。戦争にならなかつたケース、例えば、英國から米国への平和的な霸権移行や米ソ冷戦の平和的終結のように、米中は対応できるだろうか。

米中どちらにとつても核戦争という選択肢はないが、米国の大統領と一番親しいといふ人もあるが、「自由で開かれたインド太平洋」というのは、安倍首相が提案してトランプが乗つたものだし、TPPを

東日本大震災での犠牲者は2・2万人、関東大震災は最大20・5万人。これに対し、第二次大戦の犠牲者は310万人と桁が違う。民族の種子すら失われるというのはオババーな表現だが、戦い続けていれば、戦後再生のための人材すら失われた危険性は高かつた。陛下は「平和さえ得ておけば、将来に復興の光明も考え方される」と言われた。廃墟の東京で「復興の光明」と、よくおつしやつたと思う。最近出た『昭和天皇実録』を読むと、

指導会議のメンバーは嗚咽するに至つた。そのときの陛下のお言葉に、最高戦争民族が滅亡していく運命を思い、ともに泣いたことは大事な意味を持つ。意思決定のルールはあくまでも全会一致だから、一人でも大臣が反対し、もし戦い続けていたなら、民族の種子すら失われていたかも知れなかつた。

東日本大震災での犠牲者は2・2万人、関東大震災は最大20・5万人。これに対し、第二次大戦の犠牲者は310万人と桁が違う。民族の種子すら失われるというのはオババーな表現だが、戦い続けていれば、戦後再生のための人材すら失われた危険性は高かつた。陛下は「平和さえ得ておけば、将来に復興の光明も考え方される」と言われた。廃墟の東京で「復興の光明」と、よくおつしやつたと思う。最近出た『昭和天皇実録』を読むと、

(略歴)  
公立大学法人兵庫県立大学理事長(2018年4月~)  
公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構理事長(2012年4月~)神戸大学名誉教授  
1943年兵庫県生まれ。京都大学法学研究科修士課程修了。広島大学助手・助教授を経て、神戸大学法学院教授。その間、日本政治学会理事長などを歴任。  
2006年8月、防衛大学校長、11年4月、内閣府復興構想議長、12年2月、復興庁復興推進委員会委員長、12年4月熊本県立大学理事長などを歴任。文化功労者(11年度)。  
著書に  
・『日本政治外交史』(NHK出版1984年)  
・『戦後日本外交史』(編著、有斐閣1997年)吉田茂賞  
・『歴史としての現代日本-五百旗頭真書評集成』(千倉書房2008年)  
・『大災害の時代~未来の国難に備えて』(毎日出版2016年)など多数

本稿は2019年7月22日に行われた「第13回TOYROランチセミナー」の要旨を編集部でまとめたものです

をまとめた。欧洲とのEPAも、中国との関係も、朝鮮半島以外の世界中のどの国とも良い関係をつくつてゐる。そういう国が、米中がぶつかって人類史的な危険があるときに働くかないわけがない。

第二次大戦のとき、米ソがいがみ合いながらも協力し、秩序が再編されたのも、英國が間に入つて話をつけたからである。同様に、今、秩序再編は日本なしにはできないと思う。世界の至るところでポピュリズム、強権政治が荒れに荒れてゐるなかで、日本は平成の時代に三重苦ながら、穏やかな、人にやさしい生き方ができていた。ある意味で世界のオアシスだったと言える。日本は「オアシスで良い」で済まさず、世界史的な役割に目覚め、米中間の秩序再編に重要な役割を果たすことが求められている。

牙をむいた時、日本人は首をすくめて何とか生き延び、その後、勤勉に働いて建て直す。人生ある戦争に対しても、同じように建て直していくのが日本の歴史である。

國中が瓦礫となつた昭和20年、陸軍はなお徹底抗戦・本土決戦を主張していた。8月になると広島・長崎に原爆が落とされ、ソ連が参戦し、防衛戦略はもう成り立たないという宣言を巡る最高戦争指導会議ではメンバー7名の意見が分かれ、鈴木貫太郎首相が陛下にご聖断を仰ぐという「禁じ手」を用いて、なんとかポツダム宣言受諾の決定に漕ぎつけた。そのときの陛下のお言葉に、最高戦争指導会議のメンバーは嗚咽するに至つた。民衆が滅亡していく運命を思い、ともに泣いたことは大事な意味を持つ。意思決定のルールはあくまでも全会一致だから、一人でも大臣が反対し、もし戦い続けていたなら、民族の種子すら失われていたかも知れなかつた。

東日本大震災での犠牲者は2・2万人、関東大震災は最大20・5万人。これに対し、第二次大戦の犠牲者は310万人と桁が違う。民族の種子すら失われるというのはオババーな表現だが、戦い続けていれば、戦後再生のための人材すら失われた危険性は高かつた。陛下は「平和さえ得ておけば、将来に復興の光明も考え方される」と言われた。廃墟の東京で「復興の光明」と、よくおつしやつたと思う。最近出た『昭和天皇実録』を読むと、

戦後、どん底に落ちた日本は、富国強兵ではなくて強兵抜きの富国として、経済主義の尾根に上つた。強兵は米国にお願いし、あらゆる資源を経済活動に投入した。60年代には奇跡の高度成長、70年代には、ニクソンショックや石油危機などの苦しい時期を乗り越え、技術革新に取り組んだ結果、日本の家電製品は向かうところ敵なしとなつた。自動車メーカーは対米輸出自主規制を行いながら、米国との協調を図つた。そして80年代の安定成長の時代を経て、冷戦が終わつた89年、日本のGDPは世界の15%を占めるに至つた。圧倒的な経済超大国になつて昭和が終わつた。昭和は、前半の戦争、後半の平和的再生という二つの時代があり、後半を見れば昭和の名前はイメージに合つてたとも見える。

会合で、昭和天皇は「白村江の戦いに敗れた。今は改革が行われ、すばらしい躍進のときを持つた。今も本当にひどい状態だが、また大きな発展の時期を持つ可能性があるのでないか」と話されている。「復興の光明」という言葉は、昭和天皇がいわば歴史観として、「日本には再生バネがある」ということを白村江の戦いの後の時代から読みとり、太平洋戦争敗北後に改革・発展の時代を持つるのでないかと臣下を励ました言葉だと考えられる。敗戦後、何もない状況の中で歴史観に裏打ちされた希望、信念を語れる、というのは、すごいことだと思う。

戦後、どん底に落ちた日本は、富国強兵ではなくて強兵抜きの富国として、経済主義の尾根に上つた。強兵は米国にお願いし、あらゆる資源を経済活動に投入した。60年代には奇跡の高度成長、70年代には、ニクソンショックや石油危機などの苦しい時期を乗り越え、技術革新に取り組んだ結果、日本の家電製品は向かうところ敵なしとなつた。自動車メーカーは対米輸出自主規制を行いながら、米国との協調を図つた。そして80年代の安定成長の時代を経て、冷戦が終わつた89年、日本のGDPは世界の15%を占めるに至つた。圧倒的な経済超大国になつて昭和が終わつた。昭和は、前半の戦争、後半の平和的再生という二つの時代があり、後半を見れば昭和の名前はイメージに合つてたとも見える。